

第4回「就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針」に関する有識者懇談会	資料1
令和4年11月15日	

第3回懇談会（10月13日）における主な意見

※総論に係る御指摘のうちから、事務局の文責により整理したもの。

- 「理念」と「指針」は異なり、理念を掲げるだけでなく、いかに行動変容につながる指針をつくるかという視点も大事。
- 「理念」の①～⑤の順番など関連性の整理が必要。そのうえで、発達の連続性と多様性を配慮した形で、時間軸というものを足して整理していくことが求められ、科学者の視点はそこに科学的エビデンスを補強することが出来る。
- 「切れ目なく」の切れ目は何を指すのか、整理をすることが必要。福祉・医療・教育などの領域間の話、こどもの年齢が進むなかでの連続性、異なる軸がある。
- 書けば書くほど誤解は少なく、正しくなるが、興味を持たれづらくなる。網羅性も保ちながら、いかに分かりやすい指針にしていくかが肝心。
- 「こどもの育ちに関わる人」以外も、誰もが対象だと認識して関心を寄せてもらえる工夫、表し方が必要。
- この指針の「こども」は、お腹にいる時からの概念だと明確化できないか。
- こどもの最善の利益のためにこそ、保護者が応援され、楽しく幸せにこどもの育ちに関われることが大事。「子育てって完璧にはできないし、もっと頼っていい」という打ち出しが出来ると良いのではないか。
- こどもとともに育ち合い、異年齢のこどもも一緒に支え合うことも大事。
- 就学前までの指針ではあるが、就学後のこどもの姿や成長イメージとのつながりがある形にすることが必要。でないと、この指針が新たな切れ目を生んでしまう。
- 多様性の「尊重」のみならず、差別されないことの重要性を明確に位置づけ、かつ現実にも鑑み、まず多様性を受け入れる社会に向けての打ち出しが必要。その際には、多様性を認識し始める科学的研究結果にも依拠できると良い。
- 「教育・保育の質」とあるが、「質」とは何を指すかの整理と、施設の専門職がいかにアップデートしていく構造を、この指針が打ち出せるかも大事。
- 「切れ目なく」を実現するためには、共通の「視点」が必要。就学前は特に、バイオ・サイコ・ソーシャルの三つの視点で見ることが大事だと位置づけることが必要。
- 保護者にとって「信頼できる情報」が就学前指針で示され、発信されると良い。
- 親が親になる前にも段階がある。中学生のときからこどもに触れる経験、本気で「親になる」ことも意識する年代、両方を見据えるべき。